

駒村商会・駒村利之社長インタビュー

まだまだ終わらない 「暴れ馬」の活躍

取材・文＝神田憲行



撮影＝赤城耕一

こまむら・としゆき 1945年、大分県生まれの京都育ち。69年に明治大学卒業後、駒村商会に入社。86年、社長に就任。ホースマンブランドでのカメラ製造とともに、98年からは独・ローライの日本代理店業務も務めた。

2001年の1年間にわたり、本誌にビジネス戦記

「暴れ馬がいくー」を連載した写真業界の名物男・駒村利之社長。
新たな決断を下した社長にその背景や思い出を聞いた。

業務移管は実はここ3年ほどずっと考えていたことでしたが、踏ん切りがついたのが、昨年のフォトキナでした。

フォトキナ視察の際、活発に業績を伸ばしている企業と元気がない企業に大きく二分されていることを肌で実感しました。特にパワフルだったのは、日本の大手数社、中国系企業、アジア系大企業だけでした。

なぜ、かつてあれだけ華やかだった憧れのフォトキナが、い

つの間にかこんなにも寂しいイベントへと変わってしまったのか、とても残念でならなかったのです。

私はフォトキナに行くたびに、他国でプロ用フィルムカメラで頑張っている同業者たちと情報交換をしてきましたが、昨年のフォトキナを彼らも同じように感じていたようでした。

フォトキナで世界各国のプロ用カメラメーカーの幹部たちと会話をするうち、私はフィルム

カメラの衰退が業界の縮小を招いているだけではなく、もっと大きな力、特に通信業界や電機業界など巨大企業の市場参入により、巨大なマーケットへと変貌しているのではないかと気づきました。

今まで当社は、伝統的技術の粋を集めたカメラの製造や輸入を目指していましたが、今後これらのブランドの生き残りを考え、フォトキナから帰国後ケンコー・トキナーの山中徹社長に連絡をしました。

「ご相談したいことがありません」と電話したのが1回目。直接お会いして、「すみません、勝手に白羽の矢を立てさせていただけました。片思いです」と業務移管の相談をしたのが2回目。3回目にお会いしたときにはもうほぼ決まっていました。山中さんは当社の伝統ある多くのブランドを、これから大きく育ててくださる方だと確信しています。駒村商会が駆逐艦だとすると、ケンコー・トキナーは戦艦ですね。

*
昨年11月30日、株式会社駒村商会は写真機材、放送機器及び

産業関連のビジネスを株式会社ケンコープロフェシヨナルイメージング(KPI)に移管することを発表した。業界老舗の駒村商会の写真業務からの撤退は、業界に衝撃を与えた。

*
自分の会社への思い入れというのが、いちばん折り合いをつけなければいけないところでした。

この会社は私の父親とその兄で先代の正二社長がつくった会社です(年表参照)。おやじと伯父は本当に仲のいい兄弟ですね、京都の家は並んで立っていて、玄関は二つあっても中に入ると庭が一緒。いとこたちも本当の兄弟のように育ちました。おやじは私が10歳のときに亡くなって、伯父が父親代わりの方になつて育ててくれ、駒村商会に入社し輸出入の仕事を立ち上げました。その当時扱っている商品は、伯父が開発したホースマンカメラだけでした。交換レンズ3本、ロールホルダーが6×7と6×9、ケーブルリリースとかフィルターの付属品だけ、それだけで毎月社員十数人が食べてたんですから、よ



1990年代に復刻版として製造販売されたものを、さらに2010年に再度製造したローライ35クラシック。特殊な受注販売方式で、その存在感は際立っていた

くやっていたなと思います。

そういう「私のノスタルジー」が大事か、「社員の生活」が大事か、天秤です。

人はいつか死にますが、法人は永遠に続くことを前提に考えられています。でも、この会社には跡継ぎがない。息子が後継がないことははっきりしていますし、ほかの方に任せるのも、株式や銀行からの融資といった個人保証などの問題で現実的ではない。私は四捨五入すればもう70歳ですから、自分が元気なうちになんとかしなければ、社員が路頭に迷うと思っただけです。自分が元気なうちに次世代への継承をしておかなければと思います。

自分のノスタルジーだけでやってたら、えらいワガママ。業務を移管すれば商権は散逸せず、社員も今までの業務をそのまま継続できます。それがいちばんいいだろうと思ったんですよ。実務的なことは専門家に相談しましたが、3年間考えていたので、すつと運びました。

*

駒村氏が入社して44年、社長に就任して27年。最初はホームマンカメラだけの会社から、ドイツをはじめ欧米の十数社の光学メーカーや放送機器メーカーと総輸入販売代理店契約を結ぶなど、同社の業績を駒村社長は飛躍的に伸ばした。なかでもいちばんの思い出はなんだろうか。

*

伯父である先代社長が死んだときですね。この会社を引き継ぐのか出ていくのか、人生の中で大きな選択肢を与えられました。先代には息子がいるし、義理の伯母も大株主です。まずそちらがどう考えているのかが大事。そこで先代の右腕で大久保彦左衛門みたいな人に相談したんです。

「君はなにが心配なのか」

こちらは、日本人ユーザーからの要望が特に高く、駒村商会が当時のローライ本社から特別にライセンスを獲得して製造したローライフレックス用のストラップ。ファンからは大きな拍手をもって迎えられた



「伯母など大株主さんの意図を知りたいのです」

「わかった」

後日、京都に呼び出された私の前に封筒が四つ出された。ひとつは伯母の遺言状で、「自分が死んだら会社の株は全部私に渡す」とある。あとの三つは向こうの子ども3人の白紙委任状だったんです。

このようなありがたい後ろ盾と社員の協力があつたからこそ、ここまでやってこれた思いがあります。

*

写真業務はKPIに移管しても、駒村商会の会社は存続する。一時は30人を超えた社員も駒村氏と秘書、経理担当の3人になった。しかし「暴れ馬」は意気

軒昂だ。

*

今まで続けてきたドイツのシユナイダーなどのコンサルタン卜業務は引き続きやります。海外メーカーと日本の高い技術との橋渡し、日本市場進出へのアドバイザーですね。

それとは別に、韓国メーカーのLEDの総輸入代理店をやります。LEDは節電できるから、電力問題に直面している日本に貢献もできる。これは面白いですよ。

私は儲けるのはヘタクソなんです。商材を見つけて新たなビジネスを立ち上げるのが好きなんです。いま私の会社は長く秘書を務めてくれた人と経理の

人の3人です。新事業が成功したら、みんな半年くらい有給休暇を取りたいもんだねといっています！（笑）

駒村社長が10歳のとき父親が死去。そのときに優しく包んでくれたのが、先代社長だった。この写真は約55年前のもの。左が利之氏（写真は当時のもので、キズがあります）



駒村商会の歴史

| | |
|-------|---|
| 1933年 | 駒村兄弟会社として京都で創業 |
| 1947年 | 株式会社駒村商会設立 |
| 1948年 | 警察庁鑑識用カメラとしてキャビネ判木製暗箱カメラ「PC-101」完成。ホームマンの原型 |
| 1950年 | 警察庁鑑識用プレスカメラ「ホームマン102型」完成 |
| 1966年 | 西独ケルン市「フォトキナ展」に初出展 |
| 1969年 | 駒村利之氏、明治大学を卒業後入社 |
| 1982年 | 創立50周年を機に本社を東京に移転 |
| 1986年 | 駒村利之氏、社長に就任。米国テネシー州に現地法人を設立 |
| 1992年 | ドイツ、ローデンシュトック社と代理店契約。米現地法人を売却 |
| 1998年 | ドイツ、ローライ社と代理店契約 |
| 2001年 | ローライフレックス2.8FX発売 |
| 2004年 | ドイツ、ミノックス社と日本代理店契約 |
| 2012年 | 写真、放送関係のビジネスをKPIに業務移管 |